

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

ある実験で、声の特徴が異なるA・Bの二人に同じ言葉を同じ速度で話してもらい、被験者にそれを聞いた印象を回答してもらいました。その結果、Aに対しては九〇パーセント超の人が「信頼できそう、リーダーになってほしい、友人になりたい」といった、良い印象を抱いたのに対して、Bはそのような票をほとんど獲得することができませんでした。

この実験結果が示すことは、人は声だけで、その人物に対してかなり明確に「好ましい・好ましくない」というイメージを持つということです。実験で、A・Bは肯定的なものと肯定的なことの両方を話し、被験者はその二種類の言葉を聞いているのですが、否定的な内容のほうがAにより多くの「好ましい」票が集まりました。つまりAは、否定的なことを言っても好ましい印象を与えることができたのです。

会話でも演説でも、綿密なメモでも取らない限り、人はその内容を一割程度しか憶えていないと言われます。一方でこの実験が示すように、私たちは話し手の印象を、その「声」によって無意識にイメージングしています。もつと話を聞いていたいと思わせたり、逆にもういやだな、さつさと話が終わらないかなと感じさせたりするのも、①話の内容だけではなく、声によるもの、声に含まれる音の要素による影響が大きいのだということが、近年の研究によって明らかになってきました。②私たちの心は、時として語られた言葉よりも、声によって動かされているのです。

なぜ声が、そのように人の心を動かすのでしょうか。

その秘密は「聴覚と脳」にあります。

聴覚とは、音を受け取る器官である耳から入った音が、脳内で処理される一連の感覚のことをいいます。感覚というものは謎に満ちています。耳や目といった受容器が刺激を受け取り、それを脳で処理した結果を感覚といいますが、私たちはそれによって自分を取り巻く世界を認識しているわけです。

視覚はかなり自覚的な感覚器官です。見たくなければ目を閉じればいいし、見たものは絵に描いたり写真に撮ったりして再現と確認ができる。一方で耳は閉じることができず、眠っているときにも、さらには昏睡状態のときですら音を受け取り続けます。人は閉じることができない耳から絶え間なく膨大な音を受け取っていて、それは録音によって再現はできるものの、脳が自覚した音の正確な再現や確認はできません。聴覚は、視覚に比べるとはるかにア的な器官なのです。

たとえば街に出たとき、どれほど多くの音が満ちているでしょうか。木々の葉擦れ、鳥のさえずり、雑踏の音、車のエンジン音やクラクション、人の話し声、商店街から流れてくる音楽や宣伝の音など、いちいち自覚して聴いてはいませんよね。聞き流している音がほとんどです。しかし聞き流していても、その音はすべて聴覚を通して脳に取り込まれています。

人の話を聞くときには、まず話されている内容を理解しようとしますよね。声は耳から大脳の聴覚野を通じて、言葉を理解する言語野という部分に送られ、言葉の内容を受け取ります。言語野というのは大脳の新皮質という、人間が人間として進化を遂げていく段階で新しくできた部分にあります。新皮質は理性、つまり知的領域を担っている場所だと言えるでしょう。

しかし声の「内容」と同時に、私たちは声という「音そのもの」も同時に脳内に取り込んでいます。そしてこの「声という音」は新皮質だけでなく、大脳のもつとも深いところにある旧皮質を刺激するのです。旧皮質はその名の通り、発生系統としては進化のごく初期の段階でできたもので、本能領域にあたります。ここは危険を察知したり、快・不快をイと関係なく判断したりするところです。最新の研究では、音は脳のほぼ全領域に影響することがわかっています。

声という音は、新皮質と同時に旧皮質に滑り込み、「心地よい、悪い、好き、嫌い」といった本能的な感情を起こさせます。もちろん無意識裡に、です。つまり、顕在意識にも潜在意識にも作用しているわけです。

ここに声の影響力の秘密があります。言葉を無視して心の奥底に届き、私たちの感情を揺り動かしてしまう。それが声の知られざる、そして恐るべき力です。

唐突ですが、二〇〇〇年ほど時代を遡って、古代エジプトに生きた女王、クレオパトラのお話をしましょう。クレオパトラ七世は一八歳でプトレマイオス朝最後のファラオとなった女性です。ローマのユリウス・カエサルを、カエサルの死後にはその部下だったアントニウスをも虜にしたa絶世の美女と語り継がれていますが、クレオパトラを知る文筆家、ローマのプラタルコスには彼女についてこんなふうに記録しています。

「クレオパトラの容姿は、目をひくほど美しくはない。しかしその声は大変魅力的で、その声色を聞くだけで快楽であった」もちろん、b機知に富んだ話術にも長けていたでしょうが、このようにわざわざ記述されるほど、彼女の声は魅力的だったのです。声が理屈抜きにウに作用することを考えると、クレオパトラにまつわる伝説の数々も、妙に納得がいくのです。たかが声にそんな力が？と思われるでしょうか。

しかし（注）「はじめに」でお伝えしたように、声という音が脳内でどのように作用しているかという研究が進み、近年多くの

ことが解明されてきています。先ほど、声は脳の本能領域に取り込まれ、人の心を動かすというお話をしましたが、ここからはもう一つの重要な要素である「聴覚」について解説しましょう。

人間の聴覚は、感覚器の中でも大変早くから発達します。胎児の時期、妊娠六か月頃にはほぼ完成していますから、その頃から③胎児は羊水を通じて、母親の声や外部の音を聞いています。羊水の中で聞いていた声はくぐもっていて、生まれ出て空気を通して聞く母の声とはずいぶん違うはずですが、新生児は自分の母の声を間違いないと認識し、他の母親の声と聞き分けることが実験によつて裏付けられています。それどころか、お腹の中で聞いていた母の言葉、母国語に特徴的な発音に、生まれてすぐに反応することも確かめられました。この優れた聴覚は、生まれてからもさらに発達を続けます。

視覚は生まれてからしばらくは未発達で、あまり役に立ちません。そのぶんを補うのが聴覚です。胎児のときも生まれてからも、人間にとつての世界の認識は聴覚から始まります。自分を取り巻く音、特に母親の声によつて赤ちゃんは、自分のいる場所や守ってくれる人を脳に刻みつけていきます。

そして母親もまた、自分の子どもの声を出産後すぐに記憶します。憶えようと意識しなくても、脳にしつかりと刻まれるのです。とても不思議なことですが、眠っている母親にさまざまな赤ちゃんの泣き声を聞かせると、自分の子どもの声だけに身体が反応し、起きてしまうことが実験によつて確かめられています。

さて、生まれたばかりの新生児は、言葉はまだわからないものの、母親の声の調子やリズムから、感情や体調、行動まで読み取っています。

そして母親の声をはじめとする外部環境の「音」は、絶え間なく赤ちゃんの耳から入り、脳に聴覚の神経を作つていきます。ただ寝転がっているように見える新生児は、耳という閉じることのない扉から膨大な情報を取り込んで、脳はスーパーコンピュータのようにデータを蓄積し、分析して、神経細胞を増やし続けているのです。

絶対音感というものをご存知の方は多いでしょう。楽器の音でも、グラスをカチンと鳴らす音でも、瞬時に「ド#」とか「ラ」などとわかつてしまう能力のことですが、じつはその音感の素質は、すべての赤ちゃんが持っています。

ただ、成長してその素質を開花させるためには、耳から入った音をしかるべき時期（だいたい四歳前後まで）に「音の高さ」「音名」という概念と一致させないと、音感としての神経回路はできあがりません。そのため、絶対音感を持つ人は特殊だと思われていますが、音と音名を繋ぐ時期さえ間違わなければ、誰もが絶対音感を持つて大人になることは可能です。

絶対音感とはかくとしても、新生児は「あらゆる言語のいかなる複雑な発音」も聴き分けるといふ驚異的な聴覚を持つています。成長に伴つて母国語にない発音、つまり聴くことのない音に対しては回路が薄れていきますが、さまざまな声を聞いている限り、「声に含まれる要素を聴き取る能力」は持ち続けています。

そのような聴覚の能力を、ほとんどの方は自覚的に使うことがありません。しかし私たちは「声という音」に含まれる要素を、ほぼ無意識裡にはありますが、確かに読み取っているのです。

声という音は、話し手のじつに多くの情報を含んでいます。どのような情報かというと、身長、体格、顔の骨格、性格、生育歴、体調から心理状態まで。つまり、その人のほぼすべてです。

なぜそんな情報が声に出てしまうのか。その理由は追つて説明していきますが、声とはひとりひとりの履歴書のようなものなのです。声を形成する要素の二割ほどが、生まれ持った体格・骨格や声帯の長さ、共鳴腔（口腔や鼻腔など）の形など、いわゆる先天的な声の素質で、残りの八割は生育環境や性格と、そのときの心身の状態です。ですから履歴書どころか、そのときの体調や心情を実況放送しているようなものであるとすら言えます。

そして人間の聴覚と脳は、それらをすべて受け取っており、かなりの要素を読み取ることができるのです。

「まさか」と思いますか？

中国には古くから、声で人の体質や性格、生い立ちや既往症、さらには親や兄弟の体格・体質までをも読み取る「声相」という易学があります。その人の現在と過去を声から読み取るのももちろん、未来までもわかつてしまうものだと考えられてきました。同じく中国の古代医学書には、声に含まれる音から病気を判断する方法が記されています。

古くから人の声には、当人についての多くの情報が含まれていることが理解されていて、人はそれを意図的に読み取ること、さまざまな判断をしてきたのです。昔といわず、現代のアメリカの大学でも声から病気を診断する研究が進められています。

読み取る、読み取らないにかかわらず、声にはその人のすべてが出てしまうということは、ちよつと頭の片隅で憶えておいてください。じつのところ、④声はその人そのもののなのです。

（注）「はじめに」Ⅱ 問題文が載っている本の前書き。

（山崎広子『声のサイエンス』）

問一 傍線部①「話の内容」とありますが、「話の内容」はどういう過程を経て理解されるのですか。それを説明している一文の最初の五字を抜き出しなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問二 傍線部②「私たちの心は、時として語られた言葉よりも、声によって動かされているのです。」とありますが、なぜ声は人の心を動かすのですか。五十字以内で答えなさい。

問三 空欄アに入る言葉を漢字三字で答えなさい。

問四 空欄イ・ウに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 印象	2 意志	3 理性	4 感覚	5 本能
------	------	------	------	------

問五 傍線部 a「絶世」、b「機知」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「絶世」

ア 世の中にいない
イ 国を滅ぼすほどの
ウ 世に知られた
エ この上ない

b「機知」

ア その場をなごませる能力
イ とつさにうまく対応する才能
ウ 複雑な話をくみたてる知恵
エ 相手を骨抜きにする魅力

問六 傍線部③「胎児は羊水を通じて、母親の声や外部の音を聞いています。」とありますが、それがわかるのはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部④「声はその人そのものなのです。」とありますが、それはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

中学二年の九月にマレーシアから日本の中学校に編入した「わたし」(花岡沙弥)は、通学を始めてから間もなく中学三年の図書委員である「佐藤先輩」(佐藤莉々子)から声をかけられ、吟行(短歌・俳句などを作るために、名所などに行くこと)に参加することになった。りりしい姿で本の返却をうながす佐藤先輩は、学校では「督促女王」というあだ名で呼ばれている。問題文は、十月半ばに二人で吟行に出かけた先で出会った佐藤先輩の歌会仲間である望さんの短歌について、佐藤先輩が「わたし」に説明しているところから始まる。なお、望さんはこの場面ではすでに去ってしまっている。

「歌会ではね、最初に詠んだ人の名前を伏せて、みんなでその歌についての感想を言い合うの。それから、作者を明かす。でも望さんはいつもネコの歌を詠むからすぐ分かっちゃうんだ。」

思いつき笑いをする佐藤先輩を見て、わたしは何だかちよつと複雑な気持ちになった。

「いろんな世代の人と友達みたいに話すなんて、何だかすごいですね。ちよつと、うらやましかった。」

「それが楽しくて参加してるっていうのもある。わたし、クラスに友達いないから。」

さつと出た言葉に、耳がびくつと反応する。きくなら今だ。そんな気がした。

「あの、さつき、佐藤先輩は音楽大学の付属から転校してきたって言ってましたよね？ 理由とか、そのころのこと、きいてもいいですか？」

知りたかった。

転校生としての佐藤先輩の顔を知りたかった。

わたしみたいに周りの反応を気にしない。いつも堂々としている。

転校生という条件はわたしと同じなのに、どうしてなんだろう。

「逃げたかったから。」

一瞬、聞き間違いかと思った。

①それくらい、逃げなんて、佐藤先輩らしくない言葉だ。

「わたし、親の希望で三歳の誕生日からピアノを始めたの。でも音楽大学の付属中学校に入ったら、自分には全然才能がないことがよく分かったんだ。入学する前はここで一番になってやるなんて思ってたけど、実際は毎日が敗北感でいっぱいだったよ。その場所に続けるのがつらくて公立に転校したんだよね。それからしばらくは、自分は逃げたんだっていう負い目でいっぱいだった。」

敗北感。逃げ。負い目。

立て続けにそんな言葉をこぼす佐藤先輩は、わたしが知っている佐藤先輩じゃないみたいだ。

「でも、短歌に出会えた。楽器がなくても、ちゃんと心に音を鳴らしてくれる歌があるんだって知った。音楽じゃない、でもわたしはわたしの歌をつくろうと思った。わたしのやりたいことはこれなんだって、初めてパズルがはまるような感覚がしたの。それが、短歌がわたしにかけてくれた最初の魔法。」

「最初の魔法？ ②その次があるってことですか。」

「うん、さつき歌会の話したでしょ？ あそこに参加するまでは、友達のいない自分が苦しかった。わたしは別に一人でもいいんだって、強がることで耐えてたけど、一人でいると、周りの目が気になって仕方なかったよ。」

「それ、わたしも一緒です！ わたしは別に一人でもいいとは思えなくて、なじもうと必死なんですけど……。」

そう、いつも必死だ。

（注1）朋香ちゃんにくつついて、顔は笑っていても、こんなこと言ったら変じゃないかなっていつもおびえている。教室にいるとき、素の自分で話したことなんてあるのかな。

「歌会に行ったら、いろんな人に会えるの。教室だけがすべてじゃないって思える。わたしはそれに救われたの。」

そのときに詠んだ短歌があるんだけど、と佐藤先輩は前置きして、

「『それぞれの午後二時四十三分に左の指で歌を唱える』」

「何ですか、その中途半端な時間。」

そう言いながら、わたしは短歌の意味を想像した。

佐藤先輩の短歌はどれもナゾナゾみたい。

「平日の二時半過ぎっていつたら、わたしたちはどこで何してる？」

「……学校、ですよ。六時間目のまんなかくらい。」

「そういうこと！」

佐藤先輩はパチンと指を鳴らした。

「六時間目の授業中に、暇だから（注2）タンカード開いてぼんやりしてたら、ふと思うかんのだ。たとえば、わたしがこうして教室の机にいるとき、望さんは仕事のお客さんのところに向かう電車に乗ってるかもしれないし、大学生はバイトしてるかもしれないし、イラストレーターの人はきつとまた新しいイラストを描いてる。義務教育中の中学生はどうあがいたって中学生でしかないんだけど、大人になると人によって全然ちがう。そういうふうに、時間の過ごし方っていろいろなんだなって。でも、生活が全然ちがうのに、みんなが短歌でつながってるって、なんかすごいなって思うんだよね。平日の昼下がり、日常の仕事や勉強を利き手でやってるけど、実はもう一つの手では短歌を指折って詠んでいる。これはそんなイメージでつくった短歌だよ。」

……何でだろう。その感覚、ちよつと分かる気がする。

日本に帰ってから、マレーシアが恋しいと思うとき、わたしはいつもマレーシアを想像していた。こうしている間にも、マレーシアでも日常がちゃんと回っていると思うと、何だか少し楽になった。

たとえば同じ（注3）コンドミニウムに住んでいたマレーシア人の女の子。屋台でドリアンを切り分けて売っていたおじちゃん。きつと、それぞれの毎日をちゃんと今日も送っている。

もしかしたら、佐藤先輩が言っているのは、それと似たことなのかもしれない。

「望さんたちに学校の人間関係を相談したわけじゃないんだけどね。たとえ今の教室でたまたま毎日一緒に過ごすことになった同い年の人とうまいいなくても、それがわたしのすべてじゃない、落ち込むことないんだって思えたの。歌会がわたしの居場所になってくれるんだ。そう思ってから強くなれた気がする。それが次の魔法かな。」

ああ、そっか。

佐藤先輩がいつでもどこでも堂々としていられる、その理由はそんなところにあつたのか。

カラフルな絵の具が画用紙からはみ出るように、教室の外に広がっている佐藤先輩の交友関係を初めて知った。

「いろんな人と知り合いで、何か、佐藤先輩すごいです。わたしだったら、そんな短歌の集まりを見つけても、そこに一人で飛び込むような勇気ないから。」

「だって親を見返したいんだもん。」

佐藤先輩は③きゅつと表情を引き締めた。

「わたし、短歌で親を見返したい。音楽じゃなくても、わたしはわたしの歌でちゃんと一人前になれるんだって証明したいの。将来は歌人になりたい。」

「歌人になるって、どうすればなれるんですか？」

「短歌の雑誌が募集してる新人賞を取る、とか。」

新人賞だなんて、わたしの日常にはない言葉だったから、今ひとつピンと来なかった。マレーシア語でもなんていうのか分からない。

それでも佐藤先輩なら取れる。理由なんてないけど、確かにそう思った。

「そうしたら周りからも認めてもらえるでしょ。」

早く一人前になりたい、佐藤先輩はつぶやいた。

(こまつあやこ『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ』)

(注1) 朋香ちゃん 誰^{だれ}とでも仲良くできる沙弥の級友。

(注2) タンカード 短歌を書き留めておく専用カードの作中での名称^{めいしょう}。

(注3) コンドミニウム マンションの一種。

問一 傍線部①「それくらい、逃げなんて、佐藤先輩らしくない言葉だ。」とありますが、「わたし」がどのように感じたのはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問二 傍線部②「その次」とありますが、佐藤先輩は「その次」の魔法によつてどのように変わりましたか。

問三 傍線部③「きゅつと表情を引き締めた。」とありますが、このとき佐藤先輩はどのような気持ちでしたか。

問四 次の短歌は過去のタンカードに書かれた佐藤先輩の短歌です。どうということが表現されていると考えられますか。問題文全体の内容をふまえて答えなさい。

白と黒しか押したことない指が行き先ボタンをためらっている

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | |
|--------------|------------------|----------------------------------|
| 1 ユウラン船に乗る。 | 2 室内をソウシヨクする。 | 3 小笠原 ^{おがさわら} シヨトウをめぐる。 |
| 4 ソシキに属する。 | 5 数々のコウセキをたたえる。 | 6 野原をジュウオウにかけめぐる。 |
| 7 オンダンな気候。 | 8 車の運転にシュウジユクする。 | 9 ヒンジャクな内容の本。 |
| 10 親フコウを重ねる。 | 11 鳥がスをつくる。 | 12 竹にはフシがある。 |
| 13 馬がアバれる。 | 14 光をアびる | 15 日本記録をやブる。 |

[illegible]

1

a

[illegible][illegible][illegible]

--	--

--	--

--	--

11	6	1
12	7	2
13	8	3
れる		
14	9	4
びる		
15	10	5
る		